



図書館雑誌では、「北から南から」欄への会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。館界や本誌へのご意見、個人やグループなどの活動報告、研究成果、また、日常業務の中で工夫していることなどを、下記の要領でお寄せください。

★字数：1200～3800字程度（図版・写真を含む）

★様式：400字詰め原稿用紙またはワープロを使用

★送り先：〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

日本図書館協会 図書館雑誌編集委員会「北から南から」係
(FAX (03)3523-0841でも受け付けいたします)

IFLAcamp²に参加して

神谷知子・田中麻巳

はじめに

2013年度の「世界図書館情報会議 (WLIC)：第79回 IFLA 年次大会」は、8月17日から23日までシンガポールにて開催された。アジアでの開催ということで、参加したいという思いはこれまで以上に高まった。しかしながら、過去の年次大会に参加された方の報告にも、“現地で会えた(日本の)参加者には研究者が多く、私費で参加した図書館員はごく少数だった”¹⁾との指摘があるように、“図書館の現場で働く職員が本大会に参加するためのハードルは高い”¹⁾。例えば、“経費の例を挙げても、必要なのは旅費だけではない。参加費である登録料だけでも全国図書館大会時の数倍はかかる”¹⁾のである。

私たちも日程調整等の都合から、残念ながら年次大会への参加はあきらめざるをえなかった。しかし、何かIFLAシンガポール大会に関連するイベントや世界の図書館関係者と交流を深める機会はないのか、と

粘り強く調査していたところ、IFLAcampというものに出会った。

1. IFLAcamp²とは

IFLAcampは、IFLA初のアンカンファレンス(unconference)形式のサテライトミーティングで、2012年に初めて開催された。2013年度も、2度目のcampとなる「IFLAcamp²」²⁾が、IFLAシンガポール大会の関連イベントとして、年次大会直前の8月15日と16日に実施された。

主催はIFLAのNew Professionals Special Interest GroupとAsia and Oceania Section、会場はシンガポール・マネジメント大学図書館(LiKa Shing Library)で、図書館に関わる人もしくは図書館に興味を持っている人であれば、誰でも参加が可能であった。また、ProQuest社およびSpringer社がスポンサーとなり、参加費のみならず、昼食代などのすべてが無料だった。

2. 参加を決めるまで

まず、これまであまり馴染みがな

かった「アンカンファレンス」について調べてみたところ、講演者の話を一方的に聞く講義形式とは異なり、参加者自身が当日テーマを出し合い、そのテーマについてディスカッションをするものであることがわかった。IT業界からはじまったものであるが、近年図書館界でも広く取り入れられている会議形式だという。

入退場は自由で、必ずしも両日の参加が求められているわけではなかったが、IFLAcamp²に参加するには、事前の登録が必要だった。すばらしい経験ができるであろうことは容易に想像できたが、ディスカッションは英語で行われる。長期の語学留学経験などない私たちが議論についていけるのか不安はあったが、その不安よりもIFLAcamp²を経験してみたい気持ちの方が勝り、参加登録を決意した。

3. 参加者内訳

IFLAcamp²には2日間合わせてドイツ、アルゼンチン、タイ、アメリカ、フィンランドなど約20の国から、63名の参加があった。図書館員に限らず、Library schoolの学生や図書館建築のデザイナーなどさまざまな人が参加していた。日本からの参加は私たちを含めて3名で、そのうち両日参加したのは私たちだけだった。去年は欧米からの参加が中心



▲IFLAcamp²参加者と一緒に

だったとのことで日本からの参加を大変歓迎してくれた。

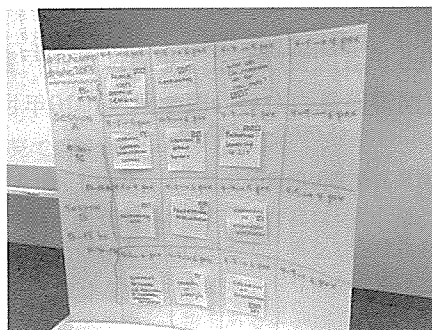
4. IFLAcamp²の流れ

会場にはホワイトボードのタイムスケジュールが用意されていた。しかし、決められているのは時間と場所の枠のみで、テーマの部分は空白となっている。そのためIFLAcamp²では、参加者が興味のあるテーマを出し合い、テーマの枠を埋めていくところからはじまった。

初日はまず、参加者一人一人が「①名前」「②出身」「③図書館との関わり」「④自分を表現するワード3つ」について発表し、自己紹介をした。その後、「図書館に関連すること」という簡単な制約のもと、早速ディスカッションのテーマについて全員で検討した。

テーマが決定すると、セッションがはじまる。同時時間帯に3つのテーマについてのセッション（45分～1時間程度）が行われるため、各自その中から関心あるテーマを選んだ。そして、集まった者同士がグループを作り、テーマを提供した参加者がファシリテーターとなりディスカッションを行った。私たちは「各セッションで最低でも1回は発言をする」と目標を定めて取り組んだ。

セッションは各日共に3回ずつ設けられ、合間には数回のコーヒープレークがあり、多くの方々と交流で



▲テーマが決まり次第、タイムスケジュールを埋めていく

きた。1日の最後には、全体で各グループのディスカッション内容の発表と振り返りを行い、情報を共有した。

5. ディスカッションのテーマ例と内容

私たちは2日間にわたり、以下のセッションに参加した。

- ・遠方の利用者に向けた遠隔教育
- ・ラーニングcommonsとインフォメーションcommons
- ・図書館組織と私的な学習ネットワークの相乗効果
- ・2020年の図書館

昔ながらの移動図書館サービスなかでも、「図書館組織と私的な学習ネットワークの相乗効果」のセッションでは参加者から各国における事例紹介があり、活発な議論が行われた。オーストラリアやアメリカからの参加者が、自らが所属している非営利組織とその利点や効果を紹介した一方で、シンガポールからの参加者は、自国では私的な学習ネットワークが少ないといった問題点を挙げた。さらに、こういったネットワークを作るためには、ボランティアの手助けが必要であり、個々の負担が少ない運営体制を考えなければならない、といった結論付けがなされた。

私たちも、自国の現状と比較しながら、図書館と学習ネットワークの

関係について改めて考えさせられるひとときとなった。

おわりに

英語による予測不能なディスカッションは、やはり難しかった。しかし、勇気を出して発言した際、共感してくれたり、興味を持ってくれたり、といった他の方々の反応が非常に嬉しかった。またIFLAcamp²では、常に日本の図書館サービスについて説明することが求められた。日本の図書館を改めて見つめなおすきっかけとなったと共に、今後は、国際的視野を持つだけでなく、自国のサービスについて一層の理解を深め、自分の言葉でよりの確に相手に伝えられるようになりたい、と思った。座って講演を聞いているだけ、また単に名刺交換をしただけでは得られない刺激と深い交流をはかることができた2日間だった。

参考資料

- 1) 鈴木史穂. IFLAヨーテボリ大会に参加して. 図書館雑誌, 2010, vol.104, no.12, p.811.
 - 2) "IFLAcamp²". IFLA New Professionals Special Interest Group. <http://npsig.wordpress.com/iflcamp2/> (参照2013-08-29).
- (かみや ともこ:名古屋大学附属図書館理学院図書室, たなか あさみ:立正大学情報メディアセンター(図書館))
[NDC 9:0106 BSH:国際図書館連盟]